

第四章



邪馬台の王宮の奥深く、樫の木を敷きつめた広大な一室の中央に、藁を詰めた絹張りの玉座にヒミコは鎮座していた。その周囲に柱をたて、大陸の皇帝より賜った金銀の緞子を張りめぐらし、傍らに三人の女兵を侍らせている。

古代紫の衣に、大陸より渡り来たった金の耳飾り首飾りで美しく飾ったヒミコの前に、大官のナシメが立っていた。顔をこわばらせ、息遣いも荒く、俯いてヒミコの託宣を待っている。

「ナシメよ。かの生口の女たちは、五国の使節を害して死に至らしめ、その兵を塵殺し、吾が兵

二十を斬った。汝は宴を司る者。この責めは汝にある」

ナシメは無言だった。ヒミコは立ち上がり、ナシメに歩み寄った。

「脚を開け」

ナシメは息を呑み込み、眼を閉じ、脚を大きく開いた。ヒミコは、その股間を蹴りあげた。ナシメは呻き、両手で股間を抑えて、床に這った。

「行け。兵に命じて、逃げた四人の生口どもをすべて捕らえよ。しくじれば、汝のふぐり玉は二つながらに碎かれるであろう」

ナシメは体を痙攣させ、もがきながら平身低頭し、床に叩頭して室を引き下がった。

続いて、二人の神官が現れた。頭髪を添った初老の小男たちだった。ヒミコは玉座にすわり、冷たく言った。

「汝等は、邪馬台の長久をことほぎ、ヒミコの武運隆盛を神に祈る。しかし、昨夜の宴で、五国の使節と五国の兵、そして邪馬台の兵が数多く死んだ。汝等は、宴の間、祈りを怠っていたか」

「否」

「汝等は祈りを怠った。汝等が祈りを怠り、五国の使節と五国の兵、邪馬台の兵が命を落とした」

ヒミコは立ち上がり、神官たちに歩み寄った。

「脚を開け」

ヒミコは、次々と二人の神官の股間を膝で蹴った。神官たちは呻いて、床に這った。

「行け。逃げた四人の生口たちが捕らえるよう祈れ。しくじれば、汝等のふぐり玉は二つながらに砕かれるであろう」

神官たちは這いつくばって室を引き下がった。

続いて、ウカシが入ってきた。あの宴の場でトヨに股間を蹴られた。つま先でまともに蹴り上げられ、腰骨との間で鞆丸が一つ潰れた。顔色が青く、歩くのも難儀なようだった。腰をかがめ、片足をひきずっていた。

「ウカシよ」

ヒミコは言った。

「汝の連れてきた生口たちが、五国の使節と五国の兵、そして邪馬台の兵を殺した。その責めは汝にある」

ウカシは唇を噛みしめ、己が不運を呪った。

「汝のふぐり玉は二つながらに砕かれる」

「偉大なる邪馬台の女王よ」

一人の女兵が言った。

「ウカシのふぐり玉は、すでに一つ砕かれている」

女兵たちは哄笑した。

「ならば、残る一つを砕け。また、二つの眼を潰せ」

ヒミコは女兵を促した。三人の女兵たちはウカシに歩み寄った。二人の女兵が、左右からウカシを押さえつけた。一人の女兵が、ウカシの衣を切り裂き、全裸にした。女兵は、懐から鉄の細串を取り出した。その一本を、ウカシの残ったふぐり玉に突き刺した。

ウカシは絶叫した。女兵は、さらにもう一本の細串を、ふぐり玉に十字に刺した。さらに、三本の細串でウカシの陽物を刺し貫いた。さらに、両眼に二本ずつ、細串を突き立てた。

もはや、叫ぶ力もなく、全身をわななかせ、息も絶え絶えなウカシは、微かに残った張力でヒミコの託宣を聞いた。

「ウカシよ。汝の軀は、鳥野辺の林に縛りつけられ、汝が息絶えるまで、鳥のついでに任せる。汝は、その罰に値する罪を犯した」

邪馬台の王都を囲む城柵から程近い森のなかに、アユメとマユワ、クシハとユズキが潜んでいた。すでに太陽が西に沈もうとしていた。

「トヨは殺されたか」

マユワが木の枝を折り、短剣で削って矢に作りながら呟いた。クシハが言った。

「否。トヨは殺されない」

「なぜ殺されない」

「ヒミコは、トヨのように、美しく、強い乙女を好む。トヨを、ヒミコを守る女兵の一人にする。

だからトヨは殺されない」

ユズキも説明した。ヒミコの身辺に侍る三人の女兵も、すべてヒミコが滅ぼしたクニの女だった。アユメとマユワは驚いた。ユズキの次の言葉は、さらに肌に粟が立つ思いだった。

「ヒミコは、夜、王宮の奥深く、鏡、劍、玉璧を置いた室で、捕らえた乙女らとまぐわう。夜が明ければ乙女たちは、ヒミコのために死を恐れず尽くす」

「ヒミコは女とまぐわうのか」

アユメとマユワは嫌悪感を露わにした。

「然り。女兵たちは、夜には、ヒミコの伽の相手をする」

アユメが意を決して言った。

「ならば、トヨがヒミコの女兵となる前に、トヨを助けねばならない」

マユワが訊ねた。

「邪馬台の兵たちは、吾らを探して四方八方に蠢いている。城柵の守りも厳しい。どうやってトヨを助ける」

クシハが言った。

「王宮の裏手は崖。そこは、守りが薄い。夜を待つて崖を下ればよい。王宮の内は、吾等がよく知っている」

王宮に、土で塗り込められた狭い一室があった。

トヨは、両手と両脚をきつく縛られ、床に転がっていた。一日、食も水も与えられず放置されていた。

扉が開いた。トヨは混濁しかけた意識を取り戻し、顔をわずかにあげた。

女が立っていた。紫の絹の中を肩から垂らし、その隙間から豊満な乳房やしなやかな脚が覗いていた。白い美しい顔に残忍な睨を浮かべている。

「生口の女よ」

女が口を開いた。

「汝等は、五国の使節と五国の兵、邪馬台の兵多数を殺した」

トヨは無言だった。女は言った。

「吾は、邪馬台の女王ヒミコである」

トヨは眼を見開き、顔をあげた。ヒミコは問うた。

「末羅の王が殺され、手形を奪われた。汝等はその手形を持っていた。末羅の王と兵を殺したのは汝等か」

トヨは答えなかった。ヒミコは重ねて問うた。

「彼等を殺したのは汝等である。言わずとも、その顔を見れば吾には分かる。汝等は、いずこのクニより来れる者か」

トヨは押し黙ったままだった。ヒミコはじつとトヨを見つめた。吸い込まれそうな妖気を漂わせた眼だった。トヨは視線を逸らせた。ヒミコは薄く笑い、口調を和らげた。

「汝は勇猛である。汝は、吾の女兵として吾に仕えよ」

「否」

トヨは激しく叫んだ。

「吾は汝を憎む」

「汝は、吾が滅ぼしたクニの王族であろう」

ヒミコは冷たい微笑みを浮かべ、トヨの胸元に手を差し入れた。なめらかな指先が、まだ硬い乳房を這った。

「汝はいま、吾を憎む。夜が明ければ汝は吾に命を捧げる」

夜が更けた。

王宮の裏手の崖には篝火が焚かれ、二人の兵が矛を構えて立っていた。

「誰か」

一人の兵が誰何した。闇のなかから、二人の少女が現れた。その美しさと、短い貫頭衣の裾から伸びる細い脚、大きくはだけた胸元の深い谷間に、兵たちは眼を奪われた。

「吾等は、王宮に仕える者」

二人の美少女は、兵たちが構える矛に眼も止めず、歩み寄った。

「今宵は眠れぬ。軀が熱い」

言うなり、一人の少女が、兵の懐に抱きつき、右手でその股間をさすった。兵は、呆気にとられて少女を見た。少女の豊かな乳房が、兵の腹のあたりに押しつけられた。

突然、兵は激しい痛みを股間を感じた。息が詰まった。少女の膝頭が、兵の睾丸に食い込んでいた。弛緩しきっていた兵の筋肉が、一気に硬直した。次の瞬間、兵は喉に焼けつくような刺激を覚えた。

クシハが睾丸を蹴り上げた兵は、背後より忍び寄ったアユメによって喉を掻き切られた。少し離れて、もう一人の兵が、ユズキに睾丸を蹴られ、同じ運命を辿っていた。

四人の女は頷きあい、絶命した二人の兵の屍を茂みに隠し、歩き出した。

トヨは歯を食いしばり、ヒミコの愛撫に耐えた。ヒミコは縛られたままのトヨの乳首を吸い、堅く蕾を閉じた陰部をまさぐった。いまだ男を知らぬトヨにとって、ヒミコの愛撫は苦痛でしかなかった。だが、しだいに軀が熱く火照り、味わったことのなかった感覚が内側から噴き出してくるのを抑えることはできなかった。頭の奥が痺れ、溢れ出る愉悦を抑えきれず軀がひとりでに振れた。

かつて狗奴の王女として山の泉で神と交わったときに感じた、あの得も言えぬ恍惚に似ていた。

ヒナは、邪馬台ではヒミコこそが神である、と言った。ヒミコはやはり神か。混濁する意識のなかで、そんな思いが浮かび上がった。

だが、ヒミコがその唇をトヨの唇に重ね、蛇のように舌が滑り込んできたとき、トヨの意識を覆っていた雲が晴れた。

「痛っ！」

ヒミコが軀を放した。唇から血が流れていた。トヨは、ヒミコの舌先に歯形をたてたのだ。

ヒミコはしばし、唇を拭った手にこびりついた己が血を見つめていたが、鬼のごとき形相でトヨの胸ぐらをつかみ、引き起こした。

「汝、いまだ吾を憎むか」

トヨは、激しい苦痛に呻いた。ヒミコは、膝頭をトヨの股間に打ち込んでいた。身を折り曲げて激しく咳き込むトヨの乳房を、ヒミコはまたも膝で蹴りあげた。トヨは絶叫し、床に転がり、激しく身悶えた。

ヒミコはなおも、

「汝は吾を辱めた。汝は吾を辱めた」

と叫びながら、トヨの肋や腰を蹴った。トヨは床を転げ回った。ヒミコは蹴るのをやめた。荒く息をつきながら喘いだ。

「汝は何者か。言え」

「吾は……」

朦朧とした意識のなかで、トヨは呻いた。

「狗奴の王女」

「狗奴？」

ヒミコは叫んだ。

「狗奴の王女は、吾が女兵の剣に貫かれて死んだ」

トヨは眼を見開いた。その眼から涙が溢れた。

「ヒナ……」

「何？」

トヨは嗚咽した。ヒミコは言った。

「あれは、身代わりか。汝こそが狗奴の王女か」

そのとき、激しく扉が叩かれた。

「偉大なる邪馬台の女王よ！ 偉大なる邪馬台の女王よ！」

女兵の声だった。ヒミコは扉を開けた。

「何か！」

慌ただしく甲冑を纏ったらしく、所どころの紐がほどけたまま駆け込んできた女兵は、膝をついて言った。

「かの生口どもが、王宮の扉を破った」

王宮の扉を開けると、そこは毎朝、邪馬台の大官どもが集い、朝議が開かれる廟堂だった。

乱入したアユメとマユワ、ユズキ、イシハは、十人の邪馬台の兵に囲まれた。アユメとマユワは瞬時に五人の兵を倒した。残る兵はおじけづき、遠巻きに囲むばかりだった。

「マユワ！」

アユメは叫んだ。

「吾はここに残り、兵どもを斬る。汝はイシハとユズキとともに、トヨを救え」

「諾」

マユワは弓をひきしぼり、奥への出口を塞いでいた兵を一人射殺した。兵たちはわっと飛び下がった。マユワはユズキとイシハを促し、廟堂を出た。兵たちが慌てて止めようとしたが、アユメの剣を受け、血飛沫をあげて倒れた。

廟堂の奥の扉を開けると、長い廊下だった。

ユズキとイシハに導かれて、マユワは矢をつがえながら進んだ。二人の兵が飛び出してきた。

マユワは一人の兵を射殺した。二の矢をつがえる間もなく、もう一人の兵が剣をふりおろした。

マユワは身を振って剣を避け、股間を蹴りあげた。兵は股間を抑えてうずくまった。マユワは二

の矢をつがえ、射殺ろした。

マユワは箆をのぞいた。残るは五本。

「兵が多い。矢が足りない」

マユワは兵が取り落とした剣を拾い上げて腰に差した。

「吾は剣は得手ではない。危うくなったら、吾を助けよ」

「待て、生口の女どもよ」

立ちふさがったのは、二人の神官だった。白い弊のついた杖を手にしていた。

「呪われてあれ。邪馬台の女王を害する者よ。ただちに剣を置いて降れ。さもなければ神罰下りて、

汝等は血反吐をはいて死ぬであろう」

二人の神官は眼を閉じ、さっさと杖を振った。

マユワは呆気にとられて立ちすくんだ。それを眺めていたイシハとユズキは、すっと歩み寄り、神官の肩を両手で押さえつけ、股間を膝で蹴りあげた。二人の少女は、なおも十数度、膝蹴りを浴びせた。神官たちの鞆丸は二つながらに砕かれ、血反吐をはいて床に伏せた。

イシハとユズキは、苦悶する神官たちを足蹴にし、憎々しげに吐き捨てた。

「血反吐をはくのは、汝等である」

三人の女たちは、さらに進んだ。廊下の奥に、固く閉められた扉があった。

「トヨはこの室に」

イシハが言った。マユワは、扉を開けた。

とたんに、二人の女兵が切り掛かってきた。マユワは危うく身をかわし、一人の女兵のに体当たりを喰わせ、もう一人の脚を払った。二人の女兵は倒れそうになりながらも、あやうく飛びさがり、体勢を建て直して剣を構えた。

女兵の背後に、縛られたままのトヨが転がっていた。

「トヨ！」

マユワは叫んだ。トヨはわずかに顔を向け、微笑んだ。

女兵たちが、再び切りかかってきた。マユワは一人の剣を受け流したが、もう一人の剣に右の二の腕を浅く切られた。マユワはさっと飛び下がった。二の腕のつけ根あたりから、たらたらと血が垂れた。

狭い室で、マユワの背は土壁にびたりとくっついていて、二人の女兵はじりじりと切っ先を揃えて間合いを詰めた。ともに、他の兵とは比べ物にならないほど強い。剣は鋭く、軀のこなしは敏捷だった。マユワは、剣は得手ではない。圧倒的に不利な体勢に追い込まれた。

だが、女兵たちは油断していた。背後から、クシハとユズキが女兵にとびかかった。背中しがつき、両脚を腰にまきつかせた。不意を打たれた女兵たちは、クシハとユズキを振り落とそうともがいた。その隙をマユワは見逃さなかった。

一人の女兵の股間を蹴りあげ、もう一人の腹部をめがけて剣を突き出した。股間を蹴られた女兵はうずくまり、クシハの重みを支えきれず、前倒しに倒れた。腹部を突かれた女兵はあやうく切っ先をかわしたが、仰向けにどうと倒れた。

マユワは、仰向けに倒れた女兵に切りかかった。女兵は剣を振り回してかわし、なおもしがみつくとユズキの腹を肘で突いた。ユズキはあまりの痛みに呻いた。女兵は立ち上がり、マユワに向かって突進した。

マユワが女兵と剣を打ち合わせている間に、クシハはうつぶせになった女兵に馬乗りになり、やたらと後頭部に拳を叩きつけていた。女兵は呻き、逃れようともがいた。みぞおちを突かれた痛みから立ち直ったユズキは、クシハが馬乗りになった女兵の後ろに回り、股間を蹴りつけた。女兵は悲痛な叫びを發した。クシハは、女兵が取り落とした剣を拾い上げ、女兵の背をめがけて突き下ろした。剣は背中から腹部を貫き、床に突き立った。女兵は大きくのけぞり、クシハは振り落とされた。

串刺しになった女兵は激しく痙攣し、全身をわななかせ、恐ろしい咆哮を發した。クシハとユズキは畏怖し、たがいに身を寄せ合って戦慄した。

「クシハ！ ユズキ！」

マユワの声に、二人の宮女は正気を取り戻した。マユワの背後に、もう一人の女兵が剣を握ったままの右腕を切り落とされ、喉を掻き切られて倒れていた。

「早く、トヨを」

三人はトヨに駆け寄り、いましめをほどこした。トヨはよろめきながら立ち上がった。

「トヨ、無事だったか」

「吾はヒミコに抱かれた」

トヨは呟くように言った。

「頭が煮え、ヒミコが神に思えた。そこに汝等が来た。吾は救われた」

マユワはそっとトヨの肩を抱いた。トヨは顔を歪ませながら呟きつづけた。

「吾はヒミコを殺す。邪馬台を滅ぼす」

「今は逃げなければならない」

マユワは言った。

トヨ、マユワ、クシハ、ユズキの四人の女たちは、土壁の室を出て、廊下を走った。廊下の向こうは広庭になっていた。庭を突っ切れば、すぐに城柵である。

だが、広庭は矛を構えた五十余の邪馬台の兵でぎっしりと埋まっていた。背後を振り返ると、さらに二十ほどの邪馬台兵が現れた。前後を挟まれた。

「生口の女どもよ。汝等は逃げられぬ」

兵を率いていたのは、大官のナシメだった。ナシメは顎をあげ、醜く笑いながら叫んだ。

「邪馬台の兵たちよ。女どもを塵殺せよ」

そのとき、城柵の方向から、怒号と悲鳴とがあがった。兵たちは、城柵の方向を振り返った。

毛皮を身に纏い、異形の風体の女たちが十人ほど、剣を振りかざして突進してきた。彼女らの後方では柵が破られ、柵を守っていた兵たちが血を噴いて倒れていた。

「サヤ！」

マユワが叫んだ。土蜘蛛の少女たちを率いて先頭を駆けてきたのは、サヤだった。数名の兵が突進した。サヤが鞭を振るった。たちまち兵たちは血に染まって倒れた。

不意を打たれた邪馬台の兵たちは狼狽した。気押されたまま、土蜘蛛の少女たちに蹂躪された。少女たちは奇声をあげた。山中で盗賊として育てられた野獣の本能のおもむくまま、逃げまどい慈悲を乞う兵たちを情け容赦なく殺戮した。たちまち多くの兵たちが屍となって転がった。広庭は血の海となった。

サヤは、トヨの傍らに駆けつけた。

「サヤ……」

トヨは呟いた。

「汝は戻ってきたのか」

サヤは笑った。

「吾はヒミコに滅ぼされた伊都の王族である。吾はヒミコを憎む。狗奴の王女がヒミコを憎むよ

「うに、伊都の王女はヒミコを憎む」

「サヤ、吾はヒミコを殺す。ヒミコは吾を抱いた。汚れた指で吾の体を撫でた。吾の軀をヒミコの血で清める」

「行け。狗奴の王女よ」

広庭での乱戦を抜け出して、トヨは再び王宮へと駆け込んだ。

廊下に飛び込むと、ナシメが這う這うの態でこちらに背を向けていた。ナシメは振り返り、トヨの姿を見て悲鳴をあげ、尻餅をついた。

「汝は邪魔するな。吾が殺すのはヒミコただ一人」

トヨはナシメの股間を踵で踏みつけた。辜丸が二つながらにぐしゃりと潰れた。ナシメは血反吐をはいて仰向けに倒れた。

さらに進むと、返り血を浴びて貫頭衣を赤く染めたアユメの姿があった。

「トヨ、汝は生きていたか」

アユメはひしとトヨを抱いた。トヨは言った。

「サヤが十人の女兵を連れて帰ってきた」

「サヤが」

「この先の広庭で戦っている」

そこに姿を現したのは、一人残ったヒミコの女兵だった。憎悪を満面に現し、剣を抜いて突進してきた。

アユメはトヨを制し、剣を抜いて女兵の切っ先を受け止めた。

「トヨ。汝はヒミコを探せ」

トヨは頷き、走り出した。アユメは叫んだ。

「必ず、ヒミコを討て」

アユメと女兵は激しく切り結び、二つの剣は幾度となく火花を散らした。アユメは問うた。

「汝はよき敵である。いずこのクニに生まれたのか」

女兵は答えた。

「不弥（フミ）」

「ヒミコに滅ぼされた不弥の女が、何故にヒミコのために戦う」

「ヒミコ様は偉大な女王である」

女兵は剣で突きかかってきた。アユメは切っ先をかわし、まっすぐに伸びた女兵の両腕を右腕で抱え込んで動かさず、叫んだ。

「ヒミコは汝の一族を殺戮した。ヒミコは汝の敵である。吾らとともに戦え」

「ヒミコ様は神である」

女兵はアユメの頬に頭頂を打ちつけた。アユメは頬を抑え、膝をついた。女兵は剣を振り上げ

た。アヌメは立ち上がり、女兵の大きく開かれた胸に頭突きを浴びせた。女兵は乳房をまともに打たれ、絶叫し、腕を抱えて両膝をついた。アヌメは女兵の背後に回り、剣をつきたてた。女兵は大きくのけぞり、硬直した。

「ヒミコ様は……神である……」

女兵は呻き、絶命した。アヌメは剣を引き抜き、女兵の顔をのぞきこんだ。愛らしい丸顔が、苦痛に歪んでいた。

王宮は血の匂いに溢れていた。廊下にも数多い室にも、いたるところに邪馬台の兵たちの屍が転がっていた。

「ヒミコ！」

トヨは歩きながら叫んだ。

「出でよ。吾は狗奴の王女トヨである」

廊下が行き止まりになったところに、大きな扉があった。トヨは把手に手をかけ、ぐいと引いた。

内部は、樫の木を敷きつめた広大な一室だった。柱を三つ立てて金銀の緞子を掛けたなかに、絹の玉座。

ヒミコの室だ……。

トヨは直感した。だが、ヒミコの姿は見えない。トヨは、油断なく剣を構え、死角となつている緞子の背後に回った。

何もなかった。トヨは肩を落とした。もう王宮内は隅々まで探した。もはや、王宮の外へでも逃げたのだろうか。

苛立ったトヨは、剣を絹の玉座に突き立て、切り裂いた。詰めてあつた藁がはみ出し、散らばった。

藁屑に埋もれた床に、四角い切れ目が見えた。トヨは藁を払いのけ、切れ目を指でなぞった。それから、切れ目に剣を差し込み、梃子のようにして持ち上げた。

切れ目は、隠し戸だった。ぼっかりと床に人が通れるくらいの穴が開いていた。トヨは、その穴に飛び込んだ。

穴の内部は、地下道になっていた。

光は一切なかった。トヨは、暗黒のなかを手さぐりでそろそろと歩みはじめた。しばし歩くと、かすかに光が射していた。

トヨは、剣を構え直し、ゆっくりと光に向かって歩いた。光は、扉の隙間から漏れていた。トヨは扉を開けた。

突然、その細い光がにわかに拡大した。閃光がトヨの眼に飛び込み、網膜を痺れさせた。

そこは、広々とした地下室だった。煌々と燈火がともされるなかに、孔雀がうずくまるように、半裸の女が床に額をつけ、呪の詞を呟いていた。
ヒミコだった。

終章



「来たれるか。狗奴の乙女よ」
ヒミコが、薄く眼を開けた。
ヒミコの額づく先、巨大な鏡が壁に祭られていた。その下に、七枝の剣と、玉璧が並べられて
あった。
ヒミコは上半身を起こした。鏡に映ったトヨを見つめながら言った。
「狗奴の乙女よ。汝はいまだ、吾を憎むか」

「憎む」

トヨは剣を擬しつ、鏡に映ったヒミコを見つめた。

トヨは、生口とされたときと同じく、裾の短い貫頭衣だった。白布の貫頭衣は返り血を浴びて、赤く染まっていた。ところどころが裂け、固い裸身がいまにもさらけ出されそうになっている。

ヒミコは、豊かな乳房を金糸を縫い込んだ黒い布で覆い、張り切った腰に獣革を巻いていた。首や肘を勾玉で飾っただけで、華美な装飾品ははずされ、熟しきった果実の怪しさを際立たせていた。

「狗奴の乙女よ。汝はなぜ、吾を憎む」

「汝は、狗奴を滅ぼした。狗奴だけではない。伊都を滅ぼした。多くのクニグニを滅ぼし、多くの人を殺戮した。吾は汝を殺す。汝を殺し、汝に殺戮された多くの霊を鎮める」

「愚かな狗奴の乙女よ。吾が何故に、それらのクニグニを滅ぼしたか、汝には分からぬか」

鏡に映るヒミコの顔が、笑った。嘲り笑いというよりも、憐れみと、いとおしさの混じった笑みだった。ヒミコは問うた。

「狗奴の乙女よ。汝は、森羅万象、山川草木に宿る八百万の神々を崇めるか」

「吾は、光や風、水の神の声を聞き、その声を民に伝える」

「では、汝は、狗奴を滅ぼされて後、それらの神の声を聞いたか」

トヨは黙した。あの日、ヒナとともに山に登り、泉の水に身を浸し、神の声を待ったが、神は

黙したままトヨと交わろうとはしなかった。以来、トヨは神の声を聞いていない。聞こうともしなかった。いや、ヒミコは言った。

「汝には、もはや神の声は聞こえぬ。このヒミコが狗奴に光をもたしたらからである」

「光」

「吾は日の神。日輪である」

鏡が一際強く輝いたように思えた。その強い光にトヨの脳は眩み、五感が萎えるようであった。

トヨタの四肢が痺れた。あの甘美な感覚、ヒミコに愛撫されたときに感じた強い愉悦が、軀の内部から溢れ出そうになった。

「日輪は闇を照らす。光は武とともにある。狗奴の乙女よ。汝は、吾等が住まうこの大地のかたちを知っているか」

眼を開けると、ヒミコは立ち上がり、トヨの眼前に立っていた。手に、七枝の剣を掲げていた。トヨの股間に、肉を引き裂く激痛が走った。

「うっ！」

トヨは呻いた。トヨの股間の肉唇に、七枝の剣の柄が深々と突き立てられていた。裂け目から流れ出た血が、柄を濡らした。ヒミコは柄を抜いた。トヨは、床にうずくまり、痛みに耐えた。

ヒミコは、柄の血を以て鏡に大きな半円を描いた。

「これが魏。中華の地。幾百万の民と広大な版図を統べる皇帝の下、豊かな文物を生み出す光の

源。そして……」

ヒミコは、半円の傍らに、細長い弧状を描いた。

「これが吾等の住まう大地。多くの王が乱立し、貧しい民を治める、夜明け前の闇に覆われた地。魏の人は吾等が住まう地を倭と呼ぶ。吾は、倭の隅々まで、光で照らす。日輪の光で満たす」

トヨは失神しそうだった。ヒミコが傍らにしゃがみ、七枝の剣を床に置いた。トヨは眼をあげた。トヨの血で線を描いた鏡に、二人の姿が映し出されていた。ヒミコは、鏡の光を受けてまぶしく輝いていた。トヨは、今にも魂が消え入りそうな容顔で、惨めにうずくまっていた。

「狗奴の乙女よ。汝には吾は殺せぬ。汝は日輪の子。わが娘。吾は汝が母」

ヒミコの声音は、優しく温かかった。幼いときに亡くした母の声音に似ていた。かすかに憶えている乳の匂いが甦った。トヨは、このまま床にひれふし、ヒミコに抱かれたい、と思った。

胸のなかに詰まっていた憎悪。狗奴の里を焼かれたときに抱いた憎悪。狗奴の民人の死、父王の死、ヒナの死。それらの思いが、春の陽光を浴びた氷のように少しずつ溶けてゆくようであった。

「狗奴の乙女よ。吾とともに、日輪の王国を築こう」

ヒミコの指が、トヨの硬い乳房に触れた。尖った乳首が、やわらかく揉みほぐされた。快い戦慄がトヨの全身を走った。同時に、ヒミコの唇が、トヨの唇に重ねられた。

ヒミコの指が、トヨの内腿を撫でた。流れ出した血に指を浸し、その指で己が頬を撫でた。トヨ

の血が、ヒミコの美しい貌をくまどった。

「狗奴の乙女よ。汝は、吾とともに日輪の王国を築くか」

そのとき、快樂の絶頂にあったトヨの脳裏に、声がこだました。

神の声。

久しぶりに聞く、神の声だった。

トヨの軀が弾けた。

その唇から凄まじい咆哮が迸った。

「汝は日輪の子にあらず」

トヨの掌に硬い金属に触れた。トヨはそれを握り締め、無我夢中で、右腕を前に突き出した。剣の切っ先が、柔らかな手応えを突き破った。

我に帰った。トヨは、七枝の剣で、ヒミコの腹部を刺し貫いていた。眼の前に、驚愕したヒミコの顔があった。眼が大きく見開かれていた。瞳が頼りなげに揺れ、何かを懇願しているように涙を浮かべていた。

「狗奴の……乙女よ……」

唇から、かすかな呻きが漏れた。

「吾が……子よ……」

その言葉と同時に、トヨはヒミコの股間を膝で蹴りあげていた。ヒミコが悲痛な叫びをあげた。

「吾は、汝の子にあらず」

トヨは叫んだ。トヨの声ではなく、トヨの軀の芯で破鐘のように響く神の声だった。さらに股間を蹴りあげた。

「吾は日輪なり。死ね。邪悪なる獣よ」

トヨは七枝の剣を引き抜き、ヒミコの頭髮をつかみ、壁に投げつけた。ヒミコの軀が鏡に叩きつけられた。鏡が割れ、その破片がヒミコの背中に、萱が繁ったように突き刺さった。

トヨは、玉璧を拾い上げた。ヒミコは、床に仰向けに転がり、瀕死の呻きを漏らしていた。トヨは、玉璧をヒミコの口に打ちつけた。玉璧は砕け、折られた歯とともにヒミコの口腔を埋めた。

ヒミコは、痙攣しながら、両手を天に差し上げ、あがいた。口から血とともに、声にならぬ声が噴き上げられた。

トヨは、もう一度、ヒミコの剣を、ヒミコの腹部に突き立てた。ヒミコは大きくのけぞり、両手を天に差し上げたまま、動きをとめた。かすかな痙攣が、まだ息のあることを示していた。

「吾は……」

虚脱したように、何かが憑衣したように、トヨは呟いた。

「日輪なり……」

それより三日の間、ヒミコの屍は王都の広庭に晒された。

その間に、トヨに命じられ、邪馬台の民びとは巨大な塚をつくった。魏志東夷伝倭人条はこう記録する。

「卑弥呼以死、大作塚、径百余歩」

ヒミコの使えた大官は、子女をのぞきすべて鞆丸を潰され、首のみを地表に出して生き埋めにされた。彼等の哀泣と恨呻とが雨風に掻き消され、静寂が覆う頃には、邪馬台の王都は一新されていた。

やがて、ヒミコに服属していたクニグニが糾合し、連合して軍を編んで邪馬台を攻めた。

「國中不服、更相誅殺、当時殺数千余人」

だが、彼等は、トヨ、アユメ、サヤ、マユワ、そして土蜘蛛の少女たちに率いられた邪馬台の軍に呆気なく敗れた。それらのクニグニの王族と大官は、子女を除き、ことごとく鞆丸を潰され、それぞれのクニに築かれた塚に、首のみを地表に出して埋められた。彼等の哀訴と悔呻とが風雨に掻き消され、静寂が覆う頃には、それらにクニグニはトヨの属国として一新された。

自らを日輪と称したトヨのクニは、永く栄えた。やがて、紀伊半島のつけ根、葛城の山々に囲まれた平地に王都が築かれ、後世に大和朝廷と呼ばれる王権が生まれた。この王権と、ヒミコが築き、トヨが受け継いだ邪馬台国との間を結ぶ環は、歴史の闇に埋もれている。(完／2000

／09／09)